あと 1

2027

PDF 制作　俳誌の salon

PDF= 俳誌の salon

一　止　庵

山田正平

あさ

一　　月

川崎大師

佐藤喜孝

一瓣の力の抜けし菊花展
傘をさし酒呑んでをり冬の鳩
くらやみが金色に凝り冬もみぢ
轉げおちたのではないと冬の龜
千歳飴わたしもいつかほほゑんで
厄除も七五三も大師寺
ビニールの恐龍に雨冬の寺
浮世繪にひともす雨の川崎宿
疊のない蕎麦屋の二階十二月
鶴が噴く水冬雨とまじり落つ

昨年『声に出して読みたい日本語』が売れた。『えんぴつで奥の細道』と名作や経文を書写する本も売れている。昨今は、脳を鍛えるということで計算ドリルが本やゲームとなって喧伝されている。寺子屋以来教育の基本は、読み書き算盤といわれている。読み書き算盤のそろい踏みである。読み書き算盤は、実社会で生きてゆく基本。そしてものを考える基本ということ。この基本だけを義務教育で確り教え込めばいいのではないか。しかしそこに、「国を愛する態度を養うため、日本の歴史や文化、伝統などを学習する子どもたちの態度を評価するのは当然だ」と、時の権力者に声高に言われるとオヤッと思う。〝態度を評価する〟う――ん。親は子供の健康や将来をおもう。子が大学へと思えば田畑を這いずり回っても学費を工面するだろう。しかし、その対価に子に愛してくれとは思わない。国を愛せよと言うのは権力者の自信のなさを露呈している。

狐火

田中藤穂

冬晴や竿売のあと灯油売
畳目に木洩日ゆれて冬に入る
子を生みしかの金秋も遙けき日
冬の真夜宇宙と結ぶ生中継
生国の盆地冷ゆるという電話
冬麗や欲捨てきれば髪かるく
見ざる聞かざる云はざる人ら傷林檎
梟の鳴く夜は父の膝に居る
狐火を見しは五人のうち二人
着ぶくれの夫を嗤へり夜の雨

ハンモック

子供の時、家にハンモックがあって、それはまだ赤ん坊の弟のためのものだった。昔の日本家屋には長押があって、六畳間の長押に吊っていた。三才か四才になっていた私を乗せるにはちょっと小さかったのか、私はたまにしか乗せてもらえなかった。でもあのブラブラと空中に寝たままゆすられる心地は何とも云えなくて、弟への羨望はずっと私の心に根付いていた。

十五年前娘の一家に誘われてサイパンに行った時、松林の中に何と大人用のハンモックが何基も並んでいて、私は久しぶりに長年の願望を果すことが出来た。

サイパンは隅から隅まで戦跡の島である。四日間の滞在中、一時も浮かれた気分にはなれなかったけれど、松風の音を聴きながら、ゆらゆらとハンモックに身を横たえられたことはよかったと思っている。

冬仕度

東亜未

冬枯となる八ヶ岳間近なり
白樺のつややかになる冬はじめ
薪を割る声の一日冬支度
落葉焚く煙は風の意のままに
小春日や天に通ずる穴を掘る
雪山か雲か白煙やがて夜
落つる日に待つたをかける冬菜漬
窓まどに朝の息吹や十二月
起き抜けの熱あつコーヒー冬もみぢ
初氷馳走となりて皿の上

犬

平成18年10月30日に15才半の犬を看取りました。ラブラドール・リトリバー種。ボビンオブレスポアールキタアイチJP。通称アドルフという名前でした。牡であるが故に盲導犬になれず生後2ヶ月で我家へ来ました。半年間犬と一緒にしつけの訓練を受け、小学生の部で優勝しました。犬を飼うことに反対した夫と戦う勢いで朝に晩によく散歩しました。私にだけ見せてくれる目差と、ぐるぐるまわす尾。それが生きる張合いになりました。八月を夏休みとして山荘ですごす習慣も、朝早いお豆腐屋さんと親しくなったのも犬のおかげでした。私の心の盲導犬であり戦友だった犬でした。停年後山荘に住みはじめた夫が、月一回の帰京をして、さて山荘へ出発するか、という朝に息を引きとりました。死期がわかって21日間水だけで時を見ていた犬は山荘のある北山が好きでそこから天へ帰りたかったのでした。

装ふ

長崎桂子

踏まれゐて傾ぎしままの草紅葉
櫨紅葉朝日に映ゆる夜の雨
風の息深くして散る櫨紅葉
登校兒踏みしだき行く櫨紅葉
筆柿のイルミネーション枝ひろげ
柿たわわ落ちてくさりて鳥群るる
寂として野中に白き帰り花
枯山水千両一本紅をさす
山眠る蹲く音に肩すくむ
方丈に数ある逸話藪柑子

露草と露虫

十一月に入って我家の周辺も少しづつ枯色になって来た。平成十八年は五月頃より暑さが相当こたえて草むしりも満足に出来なかったが、どうしたのか露草がたくさん咲きその花の瑠璃色はとっても美しく、例年より暑いと感じた毎日を癒してくれた。

或日ガスの検針の方が見えて間も無く、悲鳴に近い声が聞えたので驚いて玄関に出て見ると、鮮やかな若緑色の虫が、その方に飛び付いたり回りを飛び跳ねている。

それにしても実に美しい緑色だったなと図鑑を見ていたら「露虫」キリギリス科の昆虫で明るい草地や川原に住み、ジ・ジ・ジィ・ジィと弱く鳴く。と説明してある。

暑い盛りに露草は美しい花をつけ、露虫は眼を見張る緑色で飛び跳ねていた。また来年も、そうあって欲しいと願って止まない。

早崎泰江

いぼむしり鎌折り曲げて果てにけり
清楚なる気のただよへり秋の薔薇
うつむける茶の花そつと持ちあげる
パラグライダー芒の原を楽しめり
池の鴨あふれんばかり賑賑し
黄葉して銀杏大樹の生き返る
梵鐘の一撞しみる紅葉かな
落葉して甍あざやか永平寺
落葉掃く箒の音の軽ろきかな
初霜や告げる尾長のけたたまし

かまきりの死

十一月初旬の或る朝雨戸を開けるとブンと羽音のような音がして何かが私の肩に落ちて来た。見れば大きなかまきりである。私は悲鳴をあげ思わず手で払い落した。ちょうど窓の下にバケツがあり、かまきりはその中に墜落したのである。バケツの中にはめだかを掬う網が入れてあったがかまきりはその網に止っている。バケツの外に這い出しいなくなってくれることを願っていたが動こうとしない。私にとって昆虫は大の苦手。素手で掴むことなど出来ない。そっと観るしかない。

ひょんなことからかまきりと付合いが始った四日目の朝、今年一番の冷え込みとなった。恐る恐るバケツを覗くと、かまきりは、鎌形の前足を折り曲げ貌を隠すようにして死んでいる。日当りの良い網戸にでも止まらせてやれば良かったかもしれない。

昆虫の宿命とは言え晩秋の淋しい出来事であった。バケツの横を通る度思い出す。

甘泉園

堀内一郎

甘泉園このしじまこそ鴨の水
早々と人に逢はんと冬の鯉
池ありて人も紅葉もさかさまに
死の軽ろさ寒い林になつてゐる
安兵衛は四十三才木の実降る
仇討の碑の暗ければ銀杏黄に
壮行や桜紅葉を電車ゆく
師走人向ふ側から手を振って
十二月の隣りは闇と思ひけり
落葉落葉地球がまるくなつてゆく

地元高齢者クラブの成田山初詣に出掛けた。この辺を牛込地区と言うが昔から比べると半分の参加者、それでもバス三台、百五十名と言う。天候は小雨ながら若松町から約二時間で成田へ到着。大型バスの駐車場はいつもの処である。成田山新勝寺へは上り坂で参拝はてんでに、私は受付に朱印帖を預け本堂に御札を納め、新たなものを頂き身代りとして胸に入れた。朱印帖を手にすると皆とは別行動、駐車場まで引返して向こう側を歩けばいいのだが、本堂の前の石段を上がって町へ出た。二叉に分れて左へ行くと道が解らなくなってしまった。行ったり来たり、町の表具屋さんで聞くと百五十米戻って三つ角の左側ですよと言う。

あった、ありました。三橋鷹女像、昔お逢いしたより少々お若く感じた。一礼して例の角の酒屋で甘酒を嗜みながら鷹女像を眺めつつ昔に耽った。嫌なことの多いこの頃、この出会いが私を勇気づけてくれる。

森山のりこ

影笛に秋の夜長を楽しめり
生姜湯に温もりつつも夢の中
蒿高に薬を貰ひ冬うらら
初時雨派手なブーツに追越され
炉開やはんなりと聞く京言葉
銅鑼の音の余音たしかむ返り花
蒔灰の程よき湿り炉を開く
留石の奥へ落葉の彩重ね
散る時が来てもあざやか冬紅葉
京の秋匂袋の赤選ぶ

始めての体験

今年も残り僅かになってしまった。この秋は生まれて始めての入院を云ふ経験をした。白内障の手術であるが、手術と、聞いた丈けでも、年甲斐もなく恐れてしまう私。当日は、恐る恐る手術台に上る。局部麻酔なので、皆よく判り、やっと諦めて心を鎮めようと思った時、ふと、静かなメロディーが流れている事に気付く。手術は僅か十七分と言ふ早さであった。あとで伺うと、先生の発案でご趣味のブラームスの協奏曲であった。患者で気が付いてくれたのは、貴女丈ですと、先生も喜んで下さった。お陰で今では新聞も良く見え、自分の皺も見え過ぎである。何はともあれ、これからは健康に過したいと欲張りな願いをもって、新年を迎えようと思っています。

歯科から

森　理和

山頂の御嶽神社や冬桜
冬桜遙か都会の遺跡めく
山茶花や歯科から内科三千歩
鴨来る歯科医を出でて神田川
子のために大縄回す花八手
玉砂利や落葉浮かせし竹箒
着膨のよちよち歩き人から猿
銀杏散る東大を抜け小学校
水平線蜜柑の木よりひとつ捥ぎ
猛禽の檻の高きや冬の空

池の蜷

蜷は池の生命線です。深さ三十糎たらずのコンクリート製、瞬く間に青粉が発生した。一見すると美しいけれど水を汚す。友人が田螺を池に入れてくれた。苔生した壁を田螺が這ふ。季語にある「蜷の道」を眼の当りにした思いがした。幾筋も蜷は道を残し、数日後にはすっかり苔は消えた。蜷は青粉を食糧にしてくれていて水はいつも澄んでいた。雨水と水道水の補給で凌いできた。信州の別所温泉では田螺を拾い、穴道湖、伊豆大川、沼津、箱根、伊豆でそれらしき水の様子に出合うと探す。淡水に棲む巻貝を探す。人工の物には手当は怠れない。都会のこの池で銀蜻蜓が羽化した時には感動した。翅が徐徐に伸び乾ききるまで何時間もかかる。寝静まった頃の事、陽の登る頃には飛立ってしまう。水蘭は蜷が食糧。蜷を足しても足しても水蘭の獰猛な食欲には驚かさせる。

白

吉弘恭子

白むれば元朝ほつと息をつく
夢中より白川夜船たぐり寄す
白湯五勺焼酎五勺四方拝
白白と三方原にたびら雪
大旦白麻に印す御觸書
ゆんべから白壁に揺る注連飾
白粥に梅干(うめ)をおとして大晦日
天からの授かりものに白魔あり
白梅の莟はいまだ雪深深
明き白に二日の予定筆下ろす

コスタリカという国に興味を持ったのは憲法に武装放棄を宣言していることだ。

先日ある番組でコスタリカの話が出た。その時勉強不足な私にはドスンと胸に響いた言葉が耳に入ってきた。

あなたは憲法制定にあたり国民投票が間違いなく行われます。武装放棄をしたら他国から攻められます。その時あなた達は死ぬことになりますが、いいのですか。８３％の人が「イエス」と答え現憲法になったという。『何よりも平和』このようなぎりぎりの選択を迫られた時の局面で、『死んでもいい』という選択は限りない感動と示唆を与えてくれる。はたして今の日本人に同じ言葉を問いかけたらコスタリカのように同じ言葉が返ってくるだろうか。日本が戦争をしたと言う事さえ知らない小学生が居る昨今、知っている私は最低限平和とは戦争をしないことだと言う事を忘れてはいけない。

俳句と家庭に専心出来るこれからであることを願っている。

一茶忌

渡邉友七

冬の月一ひらの幸胸に秘む
冬木立二日の月に天緊る
かすかなる冬日の温み鴨睦ぶ
雪の灯やかまくらに似し家に覚む
日の射すと木の実降るなり小工場
きざはしに蜂死せりけり冬牡丹
子のぬくき泪拭ふや鳥渡る
膳に向へば惜命の雪降り来たる
初雪や翼あるごと沼ひかる
一茶忌や痩せ犬月のスラム守る

上海

赤座典子

姑娘（クーニャン）の闊歩してをり寒き街
地下鉄の座席冷たし菓子の散る
八十八階ビルの足元石蕗の苑
外灘（ワイタン）の写真スポット冬の靄
白髪も木の葉髪も見ず茶館混む
不夜城は魔都の名残りか毛皮巻く
片時雨近近と読む壁新聞
落葉して三叉連ぬプラタナス
名にし負ふ上海蟹の卵かな
物乞ひに走る幼女の息白し

其の日暮し

何かをする為に何を我慢するか。日々そう考えながら暮しているような気がする。

今はどんな情報でもインターネットから得ることが出来る。調べる程貴重な情報も探し出せる。一番の趣味である旅行。その計画を自分で納得出来るものに作りたくて、色々と決めていることがある。テレビはビデオをとり、CMを飛ばして見る。ワイドショーは見ない。映画・展覧会は厳選等々。やりくりの結果、作業に没頭出来る幸せなひとときである。

一方、いくら時間をかけても俳句は思うようにいかない。「思うようにいかなくて当り前。十年早い」とは分っているのだが。句作のために、可能なことすべてを後回しにして、家族に呆れられる程の時間をかけていながら満足したことがない。常々言っている。〝下手な考え休むに似たり〟はやっぱり正しい。

安部里子

おでんやの鍋底うまし古き店
冬の桐瘤の大小顔に見ゆ
冬もよしぬか床まぜる手つややか
北風に鼻からすうと糸たれる
まばゆさの銀杏落葉のすべる道
寒鴉ごみ出すを待つ鳴きもせず
にこやかな羅漢の上の散紅葉
初物や酢にて食む牡蠣箸やすめ
冬の風音符の様な吊し柿
風待つて仲間と飛んだ落葉たち

私が出来ること

昨年二月精神保健ボランティア養成講座の募集があり、今まで「カウンセリング」を学んで来た者としてボランティアとしても何か私で役立てる事がないか？あるかもしれないと思い受講しました。受講してみると精神障害の当事者が今までの経緯を話し、長い時間をかけて病気を受け入れたこと、生きる為の仕事がなく保健福祉の貧しさも話した当事者が思い描く欲しいボランティア支援のあり方、素人ぽさの何がいいか。生身の人間同士が、響きあう関係の心地よさ。余裕、余力を持った生き方への接近から得るもの。お気遣いなくほどほどに使い分けの出来る人。病気に詳しくなる事の落し穴。よく知らないことの貴重なところ。偉大なる素人性を発揮して息の長いお付合いする中で生まれるもの。この言葉を聞いて、週三回部屋をとり少しの時間じっと待つ普通であることの大切さとむづかしさを継続は力なりを実感してます。

鎌倉喜久恵

海暮るる月を待たずに帰りけり
半月の白さよ秋天暮れなづむ
梨食べて甘き雫の顎つたふ
冬支度せんとてつまり老い仕度
老いてなほ自慢の脚や山野行
つまづいて振り向けばただ銀杏散る
枯蔓をたぐれば軽し鳥瓜
みの虫は花の香りも織り込めて
数珠玉のひとつひとつに雨の粒
バス停で待つ間に銀杏二ッ三ッ

子供の頃目黒に住んでいた。畑も原っぱも川もある田舎めいたところで一日中遊び廻っていた。一生ここに居るものと思い、引越しすることがあるなんて考えてもいなかった。ところが戦火で状況は一変し、あちこち引越しを重ねることになった。

そして今は逗子に住んで七年になる。その前は北鎌倉に二十年を暮した。

逗子に来てまづ感じたのは、空が広いということだった。北鎌倉の空は細長かったから。

海が近いので一日に一度は海岸に散歩がてら出るようにしている。海で空を見ている。夏の海、冬の海、空が海を映すのか、海が空を映すのか、季節によって空と海とは響き合う。夜は空を見上げて、日の移ろい、星の輝きに、季節の動きのあざやかに見とれながら帰ってくる。こんな所に居ながら、それを十七文字にうつせないまどろこしさに溜息をついている日々である

川崎大師吟行　　木村茂登子

しぐるるや遍路姿の大師像
しぐるるや四国八十八箇所お砂踏み
しぐるるや水掛草鞋濡れに濡れ
しぐるるや修行僧（ソウ）も休らふ九のつく日
四、九日は頭を剃り衣を繕い風呂に入る日
小春めくステンドグラスに涅槃像
漱石の「門」久々に繙く文化の日
立冬の頬にひんやり化粧水
さくらもみぢ下照る道を大河沿ひ
もみぢ谷吊橋人員制限あり
円空仏も木喰仏も冬うらら

鮭

秋季展『鮭』みたくなりて行く

高橋由一の「鮭」が見たくて、NHK主催の展覧会に出掛けた。

この度も「鮭」は堂々とその存在を示していた。

荒縄で吊された姿乍、その毅然とした様は、運拙く敗れた敗軍の将は兵を語らず、の従容たる潔さを連想させる。

削がれた跡の赤い身の色は、鍛え抜かれた肉体を、乾いて鈍い光沢を含む皮からは、その感触まで伝わってくるようである。

この「鮭」から、もう一ト切れ分切り取ってみたら、と思っていた時があった。

しかし、切り取った身は背鰭までで止まっていることに今回気付いた。

フト、産卵の為、生まれた故郷の激流を溯る壮烈な鮭達の姿が眼裏をよぎった。

画く才も、充分な鑑賞眼も持たない私だが「鮭」は忘れ得ぬ作品である。

定梶じょう

烏瓜古典力学に垂（ぶらさが）る
蕎麦を刈る天に大きな影うごき
関東煮色紙の河童古びけり
トタン屋根青く塗りしへ初時雨
満載の丸太が時雨率てゆけり
布団干すここは狼煙といふところ
かほだちの父と子とたり駅のストーブ
新聞が大事しぐるる軒づたい
硝子屋のひと日聞き飽く虎落笛
冬麗のトロリーバスに乗りしこと

誤植

活字を植える、という作業が今はほとんど印刷工程でなくなったから、誤植の語は単純に印刷ミスの意味で遣われることが多い。

一方、漢字変換ミスが山のように生まれて、初校では目のあてられぬありさま、ということもあるらしい。

原稿の読み違いによる誤植は、ワープロ以前も以後も同じようにあるわけだから、変換ミスと合わせると校正にかかる負担はいよいよ重い。

以前の話。友人が「T字路」なる言葉を遣って出句。誌上では「丁字路」に印刷されていた。「てい」の変換に「T」が出てこなかったせいという。たいした句ではないしローマ字より和字の方がいいか、とは本人の弁。

さて、奥様をなくされた私の先輩。「七回忌」の前書きで〈捲いてみて妻の襟巻畳みなほす〉の句。「襟」が「腰」に誤植されてしまった。これは深刻だ。

篠田純子

大師線のコンクリ工場冬ざるる
冬の雨湯気ふくいくとまんぢゆう屋
飴を切る音の裏間に咳をする
大だるまの目の白々と冬に入る
密教の作法の音いろ冴かへる
持国天に踏まるる顔や冬の雨
霧を聞く少年獣のにほひかな
百萬円の熊手の裏を覗きけり
内職はひとてま一手間一葉忌
酉の市「暴力・たかり・スリ・娼婦」

俳句こと始め

平成十一年六月に、はじめて、傳句会に伺った。私の子ども二人がそれぞれ中学と高校に入学し、気持にゆとりができ俳句をやってみようと思ったのだ。全くはじめての経験で、短冊に句の他に自分の名前を書いてしまった思い出がある。自分の句を発表することは、心を裸にして人前にさらすような感じで、はじめのうちは恥かしかった。やがて七座句会にも伺うようになり、恭子さんの手料理とアットホームなふんいきに、おなかも心も満ち足りていった。

句を考えることで、せかせかしていた心が落着いてきて、退屈しなくなっていった。過去のつらかった事も句にすることで心の傷が癒されるように思われた。

娘は結婚することになり、大学生の息子も文学を学びそれぞれ成長している。かつて子育ての大変だった時も、親の死も楽に見つめることが出来たのも俳人の眼を持てたからかとも思う。佐藤ご夫妻に心から感謝している。

芝尚子

芋坂の羽二重團子小六月
残菊の不揃ひがよし庭の端
ずつしりと新米の荷の独り居に
神の手やひと夜白膠木の染まりけり
思い出しまた忘れゆく冬隣
聞香の末席にゐる石蕗の花
ひそやかな聲聞きづらし龍の玉
冬の芝腹みせてをり大型犬
木枯の足弱車たぬき坂
糸ほどの絆の人よ賀状書く

「あを」七周年

おめでとうございます。

二〇〇一年一月の創刊号を手にした時のよろこびを私は忘れることが出来ません。

主宰の夫妻手作りの「あを」には、愛がいっぱい詰ってゐて、あたたかくうつくしく、このやうな俳誌はたぐいまれであると思ってをります。

「あを」はこれからもずっと私達の心を豊かに楽しくして呉れる事でありませう。

それにつけても、おふたり共に躯をいとほしんで下さいませ。お願い致します。

芝宮須磨子

十一月病んで見返る過ぎし日日
その昔過ごせし町は秋うらら
秋の聖地メレンゲの雲道連れに
隣家より篭一ぱいに柿届く
体質の以た娘と語る夜長かな
気に入りの紫の花冬の墓
両手あげ友が寄り来る町時雨
子と同じマフラー編んで街に出る
入れ替に夫のイニシャル冬衣
着飾りて老ひどち集ふ事納め

お正月

月日の経つのが早いなーと思ふは年の所為でしょうか。年を越せば八十三才になってしまいます。若い頃のお正月をどう過したか思いめぐらせて見ると幼い頃はともかく十代は混乱の時代であまり正月として思い出はありません。結婚してからの何年かは炭屋のおかみさんと三人の子育てしながらの正月で年末は掛取にまわる人、支払いにまわる人、やっと掃除を済ませ、子供達の新しい着物を枕許において美容院に行くと夜があけて居たものです。

先日ふるさとの昔過した町に思い出したのが、父母とのお正月です。二日の出初式に家中がお洒落をして公園に行き味噌嘗め地蔵さんに御参りして帰えるとなぜか父の作るとろろ汁を麦飯にかけて喰べた事、出し汁を調えるのも父で子供達はすり鉢をおさへて居たのが懐かしく目にうかびます。この頃は日日自分事だけにかかわって暮らせる事を喜びとしております。

須賀敏子

鬼柚子をごろんと置けば香のたてり
菜を洗ふ背の子に声を掛けながら
妹の巻繊饂飩義母の味
哀しみに寄り添ふと決め冬ぬくし
一葉忌元気の余る子と遊ぶ
朝時雨今日はゆつくり寝てゐたし
富山（とみさん）を下る道々水仙花
ハーケンを斜めに打てり冬紅葉
荒川に長旅終へし小白鳥
電飾を重たげにして枯銀杏

丸川峠

私が初めて泊まった山小屋は大菩提丸川峠に建つ丸川荘である。一九八四年八月初心者の私達はジーンズ姿、途中から振り出した雨で足は思う様に上がらず、予定時間を大幅に遅れ、辺りは暗くなった。その時、不安になった私達の前方に一つの灯りが近付いて来た。予定を過ぎても到着しない私達を心配した小屋の青年が迎えに出て来てくれたのだ。小屋は質素な作りで明かりはランプであったが、その青年は私達を暖かくもてなし、楽しい一夜を過ごした。翌日私は、彼が彫った一位の木で出来たブレスレットを山の思い出に求め、柳蘭の咲く中を大菩薩嶺へと向かった。

今年十月、二十二年振りに柳沢峠より丸川峠へ向かった。果して彼は居るだろうか。日の当るガラス窓のむこうで彼は木を彫っていた。中年にはなったが変わらぬ暖かさで客を迎えていた。私は小さな梟の携帯用ストラップを求め、大菩薩嶺へと向った。柳蘭は今ではすっかり消えてしまったらしい。

旧街道

竹内弘子

駅前より大師道なり薄もみぢ
門前の柊の香をみなで吸ふ
純白の大き珠挙ぐ菊花展
くらがりに浮世絵泛ぶしぐれ宿
しぐるるや赤い布垂る馬頭尊
蕎麦湯あつし雨小止みなきけはひ
遊女のながれ着きけむ時雨宿
危な絵めく時雨に小袖みだるるは
浮世絵の暗きに慣れし足の冷え
短日や然らでも雨の旧街道

東京に生れ、京浜東北線の沿線に五十年ちかくも住んでいて、川崎大師へ行ったことがなかった。その先の鎌倉へはよく行くのに。

上野の根津神社、お諏訪様、浅草の観音様、西新井大師、大宮の氷川様。いまは住んでいる浦和の調神社に詣でることがいちばん多い。御参りは比較的ちかい処へ行くようだ。今回、未知の川崎大師への吟行はたのしみだった。

当日は生憎の時雨空だったが、さほど寒くもなし賑わいもほどよく、格別の趣だった。

駅前から広い参道がお大師様まで続いていて、五街道一らしい立派な馬頭観音堂があった。名代のとんとこ飴屋があった。

帰路、幹事の粋な計らいで、街道筋にある日曜休館の展示場を特に開けてもらい、艶かしい浮世絵をたくさん観せていただいた。思いがけないプレゼントだった。

漢訳蕪村

（春の句）

王岩

閑寂無人造訪日、法師悉心侍紫藤

暮春

荏苒春光老、逡巡遅櫻開

歩々沈思苦、春帰之何処

1　紅日朝霞海上来、映照山桜花盛開

2　紅日昇海上、朝霞照山桜

賞櫻来樹下、得閑花底眠

高野山上櫻花落、皆随玉川水東流

人なき日藤に培ふ法師かな

暮春

ゆく春や逡巡として遅ざくら

歩き歩き者おもふ春のゆくへかな

海手より日は照つけて山ざくら

花に来て花にいねぶるいとま哉

玉川に高野の花や流れ去る

一句

空蟬に入らんとする蹟みやう　佐藤喜孝

茶の花に隠れてをりし子供かな　竹内弘子

別れぎは夕三日月を指させり　田中藤穂

秋の雨ふたたび音を高くせり　東亜未

露草の豆電球が昼灯す　長崎桂子

芒原手折り一本持ち帰る　早崎泰江

木にのぼるから秋風が見えてくる　堀内一郎

閑庭の径をせばめて萩こぼる　森山のりこ

天高し五輛満席ミニＳＬ　森理和

畦に寝る案山子晴着の脱げしまま　吉弘恭子

笹鳴やあくがるるものとみに減り　渡邉友七

人

有難しほんのり甘き今年米　赤座典子

森の中あけび色した秋の風　安部里子

はるか先歩く人あり月の道　鎌倉喜久恵

我が家の秋の灯ぞ旅終る　木村茂登子

おほらかな母の虚言鰯雲　斉藤裕子

重力のここだけ強く糸瓜かな　定梶じょう

両の手で白湯飲み干せり秋の風　篠田純子

コスモスやいたはり合うてゐるやうな　芝　尚子

くしやみして居住まひただす温め酒　芝宮須磨子

秋の蝶追ひつけさうで追ひつけず　須賀敏子

さみしさから抜け出られるか栗の飯　鈴木多枝子

喜孝　抄

十二月作品より

赤座典子・佐藤喜孝

うす日にもまぎれ十月櫻かな　　佐藤喜孝

十月桜が、一本か二本ひっそりと立っているのは、とても風情があります。咲いていても淡い日差しに溶けこんでしまっていて、目をこらすと、かろうじて花がぽつぽつと見分けられる。旅先で、花の色を見極めたくて、木の下にしばらくいたことを思い出しました。（典子）

月渡る泰山木を煌めかせ　　田中藤穂

大木の泰山木を月光が照らしている。時と共に移る光は、その大きな葉を際立たせていく。漆黒の闇に伸びている泰山木と、月との距離がとても近く感じられる。〝月渡る〟という言葉から、こんな風景が浮かんできました。（典子）

露草の豆電球が昼灯す　　長崎桂子

大きな花はもちろんのこと、道端に咲く小さな花でもよくよく見ると造化の妙に感嘆する。露草は万葉集などでは「月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも」とよまれ親しまれている草花。花弁の色が着きやすいから「着き草」転じて「月草」→「露草」になったという説がある。この句は露草のあまりの可憐さにコロポックルのようになり仔細にみている風情。蕊の黄色がフィラメントを連想させたのであろう。露草が豆電球にみえる童心を大切にしたい。（喜孝）

はるか先歩く人あり月の道　　鎌倉喜久恵

現実の景なのだが、夢幻的である。写生句のようであるが、心象句のようでもある。〝はるか〟の働き大である。「この道や行く人なしに秋の暮　芭蕉」の句を想起した。滋味掬すべき作品。（喜孝）

想ふことが母の真実秋日和
おほらかな母の虚言鰯雲　　斉藤裕子

近頃句会で裕子さんをお見かけしないのは、これ等の句と関係があるのでしょうか。今迄と違う事態に遭遇し、身内として到達された心境を、的確に句にされていると思いました。秋日和・鰯雲、という澄み切った季語を選ばれた、作者のやさしくて強いひととなりが伝わってきます。（典子）

重力のここだけ強く糸瓜かな　　定梶じょう

長い茎から下がっているへちま。大きな葉や蔓を押しのけてその存在を強調している。確かにあのドーンと下がっている様子は、重力が十分働いていると納得できます。〝ここだけ強く〟という目の付け方に大変感心いたしました。（典子）

秋の蝶追ひつけさうで追ひつけず　　須賀敏子

確かにそうだ。ヒラヒラ、パタパタと飛ぶ蝶の飛びざまを思うと追いつけそうだが、観察すると結構早い。昆虫採集で苦労した思いがある。花に止まって蜜を吸うのに気を取られているところをうしろから不意打ちして網をかぶせる。それでも逃がしてしまう。文明の利器、インターネットで調べたら、蝶の飛行速度は時速8～15㎞風に乗れば20㎞ぐらいで飛ぶそうだ。おもったより速い。しかし、そういう理屈より蝶の速さを「追ひつけさうで追ひつけず」と捉えたところにおもしろみが湧く。この句は、「秋の蝶」ではなく、ただ「蝶」と表現すべきかも知れぬ。（喜孝）

さみしさから抜け出られるか栗の飯　　鈴木多枝子

出来たての栗御飯――そこから上がる湯気とやわらかな色の栗に顔を近付けるだけで、身も心も幸せになれる気がします。寂しいという気持ちも忘れてしまうのでは。美味しいものを頂いて、寂しさを押しやってしまいましょう。次は何をいただきましょうか。ほかほかの卵かけご飯も捨てがたいですよ。（典子）

お茶の花

田中藤穂

訪うて先づ天女と逢ひし冬伽藍

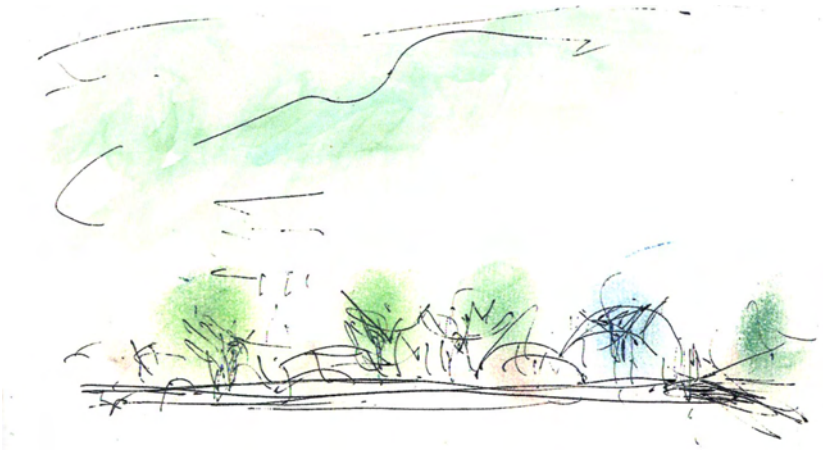
通し鴨来し鴨ややあつて馴染む

萩伐つて言葉少なき朝ゆふべ

雁渡し深井戸の蓋ずれてをり

お茶の花日々の生活のつつがなく

柚子の湯にあたたまりたる鼾かな



広辞苑に出てゐぬ言葉漱石忌

酉の市はぐれじと手を握りしこと

童話めく銀座の交番クリスマス

鰐口のぐあーんぐあーんと十二月

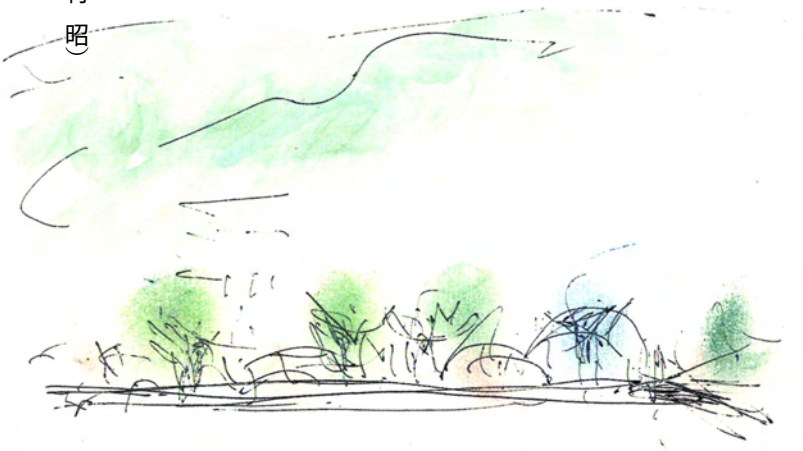
ヒマラヤ杉の大樹の下に年惜しむ

鼻固くして大寒の墓地歩く

底冷の吉野の夜具のやはらかし

冬茜遺作「死顔」読み継げる（吉村昭）

窓閉める寒夕焼がさびしくて



椿象を大きく育て蓬萊山

丹頂の雪にまぎれず凍てゝをり

春の野邊イルカ跳して土龍ゆく

いつの世のだれかは知らず螢文字

うしろからライオン見てはいけません

かなかながなかなかなかと鳴きだせり

新・十二支

佐藤喜孝

山椒魚深爪の人逝きしのち

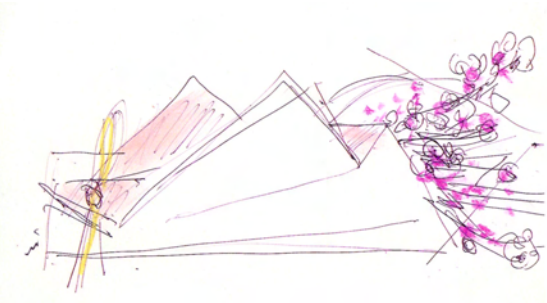
白鯨と夜霧の街で待合せ

枯野から一目散に猫が來る

地下深く燈す驛あり冬の蟻

青海鼠敵はをれど討たずをり

鵬に百年經ちし卵かな



欧州紀行

庄司ひろみ

今回はフランスのロワール地方を中心にお送りしたいと思います。

ロワール古城はロワール川沿いに点在する400以上ある古城のひとつです。時間があれば古城巡りをしたかったのですが、先の行程を考えて今回は断念しました。ここだけ時間が止まっているかのようで、今にも

ブルージュ大聖堂

ヴェズレーの丘

ヴェズレーの教会

ヴェズレーの町

ロワール古城

中世の騎士が現れそうな雰囲気が漂っていました。

次は12世紀末から14世紀に建てられたブールジュにある大聖堂です。最初に目に飛び込んできたときは、その存在感に圧倒されてしまいました。外観もさることながら中のステンドグラスがまたすばらしいのですが、写真ではなかなかそれがお伝えできないの残念です。聖書に基づく物語が、四齣漫画のように描かれているのですが、予習をしてから見ていたらもっと楽しめたのではないかと思います。

最後はヴェズレーの丘と街の様子です。ここはもうブルゴーニュ地方に属し、街の中心にあるサント・マドレーヌ聖堂はダビンチコードでもおなじみになりました。

したマグダラのマリアを祀っており、中世以来、多くの巡礼者が訪れる聖地として栄えてきました。教会へ向かう途中で、若い修行僧が笑顔であいさつをしてくれたのが印象的でした。

あを歳時記（新年）

門　松　門松や川ありてこそ町遺る　堀内　一郎
　　大門松今半上野広小路　芝宮須磨子
松の内　道尋ね深くお辞儀す松の内　山荘　慶子
初　日　始祖鳥が木を攀る初日の出　佐藤　喜孝
　　初日さす豚舎トタンの屋根一群　定梶じょう
　　初日出づ林檎いろから柿のいろ　長崎　桂子
初富士　初富士や真っ直ぐつづく中央線　森　理和
　　初富士や不穏の気色寄せ付つけぬ　早崎　泰江
　　初富士をはるか彼方に遠眼鏡　鎌倉喜久恵
　　初富士のてのひらの中三ツ峠　須賀　敏子
年賀状　会いたいといつも添書年賀状　松村美智子
　　字幕のやう一言添ふる年賀状　赤座　典子
　　年賀状一筆欲しと思ひけり　芝　尚子
初　鏡　私だけ時間のとまる初鏡　篠田　純子
初　詣　村人の長靴ブーツ初詣　田中　藤穂
　　初詣氏神木花開耶姫命　木村茂登子
　　玉水を額にうけとむ初詣り　吉弘　恭子
年　玉　神棚にしばらく上げしお年玉　竹内　弘子
新　年　新年の猫にかつぶし三グラム　安部　里子
御降り　御降りや犬も合羽を着せられて　鈴木多枝子
　　御降りやうからに似たる仏達　渡邉　友七
初　釜　初釜や濃茶点前の粛粛と　森山のりこ
初電話　初電話今汝のことをと母の言ふ　斉藤　裕子

あを吟行会のお知らせ

吟行地　巣鴨高岩寺（とげぬき地蔵）
日　時　三月十八日（日）午前十一時
集合場所　ＪＲ巣鴨駅改札を出たところ
（改札は一カ所のみ）
食事・句会場　「北前そば高田屋」巣鴨店
巣鴨駅前「成文堂書店」横地下一階（一時～）
TEL０３・５９６１・６９０１
申込締切　三月十日
幹事　赤座典子　042―492―2943

十一月の句会

傳句会　中野区　カフェ傳

堂内のあたたかき闇小六月　綾子
残菊の不揃ひなるがよかりけり　尚子
野茨の赤き実つづく突如栗鼠　敏子
海暮るる月を待たずに帰りけり　喜久恵
睦めるは争ふに似て鴨羽搏つ　弘子
初霜や小石に影の一つづつ　喜孝
終の色のこし花梨の落下かな　恭子
赤ン坊どこも柔軟くて十三夜　寒林
小春かな西班牙瓦玻璃めける　典子
立冬を頬につたへて化粧水　茂登子
冬晴や竿売のあと灯油売　藤穂
土竜穴ふかふかと踏む小春かな　敦子

調句会　さいたま市 岸町公民館

生国の盆地冷ゆるといふ電話　藤穂
生き生きと捨菊香る昼の月　敦子
黄葉して銀杏大樹の生き返る　泰江
声もなく猫のつれだつ返り花　綾子
同色の生き物うごく枯律　弘子

川崎大師吟行

ひいらぎの香りをり花みつけたり　茂登子
ビニールの恐竜に雨七五三　喜孝
大師線のコンクリ工場冬ざるる　純子
本堂の蓮金色畳冷ゆ　藤穂
冬の雨目無し達磨の整然と　綾子
初しぐれ錠のかかりし鐘楼堂　泰江
枯葉落つ廣目天の年埃　恭子
せき止の飴切る音軽し冬めけり　良雄
亀のいろ石のいろなど時雨れつつ　弘子

七座句会　中野区　小川苑

山茶花の白に始まる散歩道　一郎
聞きそびれ云ひそびれたる冬桜　喜孝
冬麗や欲捨て切れば髪かるく　藤穂
表札に夫の名残し二度の秋　多枝子
少年に獣のにほひ霧を聞く　純子
もろ手あげ友が寄り来る時雨街　須磨子
赤い靴もうすぐ落葉に埋まりさう　東亜未
仄聞は山茶花のうしろにたまる　恭子
聞香の席に連なる冬はじめ　尚子
聞き囓りの知識は小声根深汁　夏子
オペラ座や仮面のやうに葡萄散る　理和

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3木曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを林檎　偶数月第3日曜
女性センター　ブーケ21
篠田純子（5250-2776）

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

あを吟行会
奇数月　第3日曜

表紙を今年は初心に戻り私のスナップ写真に。昨年の赤座吉保さんのトリの写真は象であった。よく見ると子象も親象も足首が濡れて黒くなっている。水飲場の帰りだろうか。鼻も黒く変色している。水を呑んできたのだろう。元気になった子象が先立って歩いている印象的な作品。いろいろ貴重な瞬間を捉えたアフリカシリーズであったが親子の写真は見るものをやさしくしてくれる。

一月号は平家の落人部落で有名な「湯西川温泉」。ホテルの窓からという無精な撮り方。山を越えて現れた朝日の影を撮りたかったのだが……。

前月作品評を一年余の間、赤座典子さんに書いて頂いた。感謝。一年間の努力が選句力となって現れてきた。この選句力を自作に向けて一段の飛躍が望める。今年度の作品評は竹内弘子さんにお願いしてある。一月号は会員作品十句と短文で構成した。普段の月は作品五句になるので力が有り余ることと思う。その力を特作へ回していただくことにした。依頼の有無に拘わらず随時特作をお待ちしている。「あをかき集」は堀内一郎選になり二月号より掲載します。

猫に昨年の夏頃からかまけている。黒と白の野良猫である。前からいる野良猫も子猫の頃からかまっている。人見知りでやっとすこし馴れてきた。餌を私の手から食べるのが好きで突っ慳貪に路上に置いておくとスタコラ背を向けていなくなる。今の猫もはじめのうちは警戒心旺盛であったが、近ごろでは人の膝の上でうつらうつらするのがお気に入りのようだ。向こうはじゃれているつもりだがやはり野良猫、意外と爪が鋭い。寒い夜はどこで寝ているのだろうか。（喜孝）

二〇〇七年一月号
十二月十三日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090-9828-4244
佐藤喜孝
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。